

# テイトゥス・リウィウスと初期ローマの歴史

—— ローマの歴史叙述の問題性について ——

石 川 勝 二

(西洋史学研究室)

(昭和63年10月11日受理)

1989年3月名古屋大学教授を定年退官される国原吉之助先生に、長年賜わった御指導を感謝して本論文を捧げる。

歴史家はいつの時代を研究しようといかに史料が少ないか、史料がどれほど信頼できないか、深く注意を払わなければならない。とりわけ時代が古くなるほど史料は少なくなり、信頼度もまた落ちるものである。不正確だけでなく、さまざまな捏造がこっそり入り込んでいるという疑いも強くなる。とりわけ古代の歴史叙述は偶然によって残ったと言ってよく、現存の歴史叙述はどのようにして書かれるに至ったか、その再構成は今や不可能に近い。とりわけ初期ローマの歴史、つまりアーケイック時代（前6—4世紀）に関して以上のような問題が起こっている。ローマのアーケイック時代の史料は、リウィウス、ディオドロス、ディオニュシオスの歴史叙述、キケロの著作、プルタルコス伝記とむしろ豊富にある。しかしこれらの史料は前1世紀後半以後に書かれたものばかりであり、1つも同時代の史料ではない。もちろんそれより前の歴史叙述は多数あったが、すべて失われてしまって現存していない。実際の歴史と歴史叙述が成立した時代とがあまりにも掛け離れているので、その間にさまざまな段階で多くの捏造が歴史叙述に入り込んだのではないかと疑われてきた。ローマ人はまた古い時代より多数の記録を残したのは間違いないように思われる。歴代の執政官の表、大神官の年代記、法や条約など神殿に保存された記録が知られている。ローマ最初の歴史家、前3世紀末のファビウス・ピクトルはギリシア語で歴史を書き、かれの後にも多数の年代記者が年代記風の歴史を書いた。前2世紀には大カトがはじめてラテン語のローマの歴史を著わし、前1世紀にも多数の年代記者や歴史家が輩出した。しかしこれらの歴史叙述は、上述のリウィウスなどの著作を除いて、わずかにその断片を残すのみですべて失われた。ローマの古記録の実物もことごとく失われ、現存の歴史の成立のプロセスは、推測に頼るほかない。

ローマの歴史叙述の問題は、とりわけリウィウスの信憑性いかんという問題であった。リウィウスはさまざまな記録を収集して、1つに合わせて、まとまった史話を作り上げたが、歴史家としての態度は、伝説を受け入れ、忠実に繰り返す傾向があった（コリングウッド）という主張は、リウィウスに下された見解を代表するものと言える。つまりリウィウスは史料批判の態度が欠け、正しい歴史を伝えるどころでなかったという批判である。しかし問題はそれにとどまらない。かれ以前の歴史がすでに捏造されていたから、かれの典拠にまでさかのぼり信憑性を疑わねばならないという議論ははやくから起こっていた。リウィウスの著作をめぐる論争は、ローマの歴史叙述そのものをめぐるもっとも重要で、議論の多い問題となったのである。

われわれがローマの歴史叙述とその問題点を研究しようとするとき、ドーレイ編著の入門書 [19] ([ ]内の数字は Bibliography の番号を示す)、ブルクの編集になるリウィウスに関する論文集 [21]、ペーシュルのローマの歴史叙述に関する論文集 [23] などがある。だがこれらの本で取り上げられたリウィウスの典拠についての研究は不十分であり、むしろディオドロスの典拠の論議が多い。しかもこれらの論文集が編まれてからすでに四半世紀以上がたっているのみならず、最近になって議論はいつそう活発・多彩の様相を呈している。

## I

失われ古記録はどのようなものであったか。キケロ（『弁論家について』Ⅱ 52）は、「大神官の長 *pontifex maximus* は毎年の出来事を書き物にして、かれの館（王宮）の白い板に載せて公にした。したがって国民はこの白い板を知ることができた」と語り、リウィウスも「大神官の記録簿」を主要な史料と述べている。4世紀後のウェルギリウス学者セルウィウスも、「毎年大神官の長は執政官やその他の政務官の名を頭書した白く塗った板をもち、その上に毎日記憶すべきことから、国内や国外の、陸上や海上での出来事、を書き付けるのが常であった」と注釈している。大カト（『起源史』＝アウルス・ゲッリウス『アッティカ夜話』Ⅱ 286）が、いかにしばしば穀物は値段が高かったか、いかにしばしば日食や月食が起こったかその種の事件は記録したくない、と軽蔑を顕にしたことや、前295年の事件を列挙したリウィウスの典型的な文章から、その内容もある程度知ることができる。また大神官の年代記は、前130年ころに大神官の長であったプブリウス・ムキウス・スカエウォラによって80巻にまとめて刊行され、『大年代記』*Annales Maximi* と呼ばれた、とキケロは言っているが、それ以上のことはなにも分からない。

しかしながら同時に古記録の信頼性について疑いを表明したのはキケロやリウィウスその人たちであった。つまり古記録が直接後世に伝わったのではなく、ガリア人のローマ劫掠（前390年）のとき破壊され、その復元の過程で捏造が入り込んだという考えはかなり広く行き渡ったらしい。リウィウスは建国からガリア人のローマ劫掠までの歴史が曖昧であると言って、その理由の一つは記録が少ないことであると述べた後、「大神官の記録簿、その他の公的および私的な記録があったとしても、ローマ市の大火のさいに多くのものが失われた」という理由を挙げている（Ⅵ 1, 1-3）。だがかれはこの大火以後ローマの内外の歴史は明瞭で信頼できる説明をもったと付け加えている。プルタルコス（『ヌマ伝』1, 1-3）もまたガリア人の侵入時の記録の焼失とその後の改竄を伝えている。これとは別にキケロは、葬送演説 *laudatio funebris* が、祖先の功績を際立たせるためにあえて記録を改竄したと述べる。「葬送演説によってわれわれの祖先の歴史は非常に歪曲された、なぜなら、実際以上に多くのことがそこに書かれているからである。偽の凱旋式、実際より多い執政官職と偽の出自と平民への移籍が伝えられている」（『ブルトゥス』62）。リウィウスもまた「記録は葬送演説や彫像の偽の功績文によっても偽造されたらしい。ローマ人は自らの家のために功績ある名声や頭職を偽造し偽って伝えたからである。そのうえ確信をもって言うことができるのは、個人の事蹟と公的な事蹟の記録が混同されていることである」（Ⅷ 40, 4-5）。こういう古代の証言から、前5世紀までの記録は疑わしい、いや前4世紀全体を通じて記録はなんらかの改竄の手が加えられているとさえ主張された。

## II

現存のローマの歴史叙述に関する議論のうち、とりわけリウィウスの著作についての議論は活発である。なぜならリウィウスはもっとも新しい、しかも信頼性に問題のある歴史叙述のみを使って書いたから、かれの著作が疑わしいのはローマの古い時代に関してばかりではないという批判の声がはやくから上がった。つまりローマの興隆の時代も、その戦争を正当化するため歴史は捏造・歪曲された、という意見が19世紀以来繰り返されたのである。リウィウスの史料に対する態度について論じたものとして今も価値を失っていないと言われるニッセン〔2〕は、19世紀半ばころの著作である。かれはリウィウスの第31巻以後の部分を検討し、ローマの東方ギリシア世界に対する政策についてリウィウスが典拠としたポリュビオスと後期年代記者の2つを比較し、後者の史料上の価値はないとし、これに依拠したリウィウスの報告の信憑性は低いと結論した。モムゼンは〔1〕、かれを共和政の精神の息吹とアウグストゥス時代の洗練された教養とに十分通じ、趣味のよい、洗練されたラテン語で書いた読みごたえある注目すべき歴史家と評価したが、しかしかれの年代記は、ファビウス・ピクトルの年代記同様歴史書ではないと断じた。

さて、ディオドロスの内容が簡潔なのに対して、リウィウスとディオニュシオスはむしろ冗長な内容であることから、ディオドロスは最古の年代記を正確に保存した、という考えが古くからあった。今世紀始めに初期のローマ史の優れた概説書を書いたベロッホ〔3〕は、ディオドロスがスッラ以前の、それまでの歴史叙述を比較的純粋に保存して書いた年代記者、クラウディウス・クワドリガリウスないしリキニウス・マケルを典拠として書いたのではないかと推測し、リウィウスとディオドロスの執政官名を比較してみると、初期の名の97%は一致するから、執政官表は基本的な史料と認められるが、初期の平民出身の執政官はことごとく後世の挿入とみななければならないと断言した。執政官表の信頼性を批判する意見は古くからあり、ベロッホの見解はむしろ「保守的」とディドレイ〔40〕は評しているが、ベロッホには共和政初期の重要な記録、執政官表に対する懐疑的な見解がはっきりと表れており、この問題の長い議論に1つの画期を成したと言える。

今世紀始めからの、フォルムなどローマの古い遺跡の考古学発掘の成果に基づいて、フランク〔4〕はローマの歴史家は、初期の歴史家以来、非常に多く存在した記録を利用できたローマの歴史叙述の信頼性を再評価した。フランクはさらに年代記者を1つのカテゴリーにまとめることに反対している。すなわちグラックス兄弟以前のファビウス・ピクトルからカルプルニウス・ピソにいたる政治に関与した歴史家、それ以後の初期のローマ史をわずかな骨子をもとに豊富な興味ある伝説を加えて書いたグナエウス・ゲッリウスや、党派の闘争に関与したのち歴史を政治的に歪曲したサルスティウスらのグループ、そして最後にキケロの時代の職業的な歴史家の3つに分けることを提唱する。第一のグループの歴史家は、共和政の歴史に関して手に入った材料を記録するとき、文章や個人的な観察をかれらが法務官として法廷を主宰したときや、元老院議員として国際関係を論じたときと同じ細心の注意を払って採用したうえに、その短い歴史的な注記は大部分がポリュビオス、キケロ、ディオドロス、リウィウスの叙述の骨格となって保存されていて、ローマ人のこのような歴史の骨格は連綿として存続したので、伝承はつねに正道を逸脱せず、現世の手の届かないところにおかれた、とフランクは結論して

いる。またローマの第2の世代の歴史家、すなわちグナエウス・ゲリウスなどの通俗的な歴史家、リキニウス・マケル、サルスティウスなどの政治的に歪曲した歴史家は、かならずしも高くは評価できないが、この第2の世代の歴史家の手に入った公的記録は、一般的に価値のある材料であった、とかれは見ている。大神官の記録、神殿に保存された元老院議決、法、条約などの碑文が信頼できる歴史の記録をかれらに提供したからである。そしてこれらの神殿の記録類はガリア人のローマ劫掠に遭ってもけって滅ぶことなく、アウグストゥス時代まで損傷を受けることなく保存された、とフランクは主張する。

ローマの歴史叙述の歴史を概観した論文が1930年代の後半に相次いで出た。しかしその論調は古記録を始めとしてローマの歴史叙述に対しても信頼性を厳しく批判するものであった。この議論の代表として、ブルク編の論文集の巻頭を飾ったクリングナー [5]、ペーシェル編の論文集に収録されたクノッヘ [6, 7] を挙げることができる。これらの論文は注が一切なく、大家の研究の総括を思わせる観がある。事実クリングナーの論文はローマ人の歴史叙述の歴史に万編なく目配りした優れた論であることは疑いない。

ローマの歴史は長く元老院議員によってのみ書かれた。そして元老院議員は歴史を政治の道具としてとりわけ重要と考えた。それにはローマ人の過去に対する独特の関係に原因があった。ポリュビオス (VI, 53) はローマ貴族の葬儀の様態を述べている。葬列は死んだ祖先の胸像によって先導され、これには、その人の国家への奉仕と栄誉を示す文がついていて、いつも家の名誉な場所に置かれ、注意を引いた。葬儀にさいし喪主が死者の栄誉を讃えるとともに、先祖の功績もまた胸像と喪主の演説によって披露される。ここには生存者と死者との共同意識が強く表明され、すでに歴史的意識が芽生えていた。

ローマの有力な神宮、つまり大神官の記録は歴史の著作と類似点をもった。大神官はローマ人の最初の歴史家であり、すでに前3世紀に歴代の記録に従ってローマ市の起源からその歴史の基本を記録した。これはまだ歴史そのものとは言えないが、過去の情報を得るために元老院議員によってさかんに利用された。しかしファビウス・ピクトルの作品は、内容からも形式からも、大神官の記録にはほとんど依拠していなかった。ファビウスには初期の共和政時代の叙述が少なく、かれの主題は同時代の第1と第2のポエニ戦争の歴史を詳しく語ることであった。かれは事件を単に叙述したのではなく、説明し理解しようと試みている。かれがギリシア語で著したのは、ギリシア人にローマ人の行動と精神を理解させ、ローマの政策を擁護しようとしたからであった。

大カトは、最初のラテン語の歴史を書いて、門閥貴族のギリシア文化にかぶれた風潮に鉄槌を下した。かれは貴族の指導者に対して軍団を、偉人に対して全体を讃えて、歴史は国民の偉大な行為や健全な慣習を模範として示すことであると強調したように見える。しかし大カト以後の歴史家は、かれの真の後継者にはなりえず、歴史の創作に従事した。カッシウス・ヘミナは、宗教的な古代学を好んで研究したようだが、宗教慣習の平凡な説明に終始した。カルプルニウス・ピノは、明らかにローマ史を逸話でもって豊かに飾りつけた。若干の現存するものから判断すると、ロムルスが晩酌にさいして翌日の公務を考え節度を保ったとかのつまらない教育的な逸話が多かった。ピノに功績があったとすれば、極めて少ないながら初期共和政の記事に日の当る場所を与えたことである。かれは大神官の古い書き板を引っ張り出してきて、補足したのであろう。つまり大カトの時代以上に年代記と歴史叙述とを近づけた。大カトより少し若い歴史家では、ガイウス・フェンニウス、センプロニウス・アセリオ、コエリウス・アンティ

パテルらがいた。ファニウスとアセリオは実際グラックス兄弟以後の政治にも関与して、その体験から政治史を書き、アンティパテルは政治に関与しなかったので、散文による一種の英雄叙事詩風の歴史を書いたと思われる。

小スキピオおよびグラックス兄弟時代の闘争を壮年期に体験したクラッディウス・クワドリガリウス、リキニウス・マケル、ウァレリウス・アンティアス、シセンナなどの年代記者は、前代の人と本質的に異なる方法でローマ史を豊かにした。かれらこそローマ史をもっとも悪くした破壊者としてその不名誉が歴史研究者に知れ渡っている。初期共和政の半ば空白の歴史を伝承の拡大と誇張によって穴埋めしたのはかれらであり、もっぱら古い時代の抜きんできた英雄的行為を新種の英雄叙事詩で歌い、国民の偉大な長所ばかりでなく、その歴史家の時代に栄えた家の誉れを讃美した。若きマンリウス・トルクワトゥスがげげげしく飾ったガリア人の偉丈夫を一騎打て倒したのは地味なローマ的な勇気を示す好例としてクラッディウスを経てあまねく知れわたり、この非常に古い伝説によってマンリウス氏は、ローマの歴史に結びついた。リウィウスが保存している多くの英雄的行為の伝承もまたクラッディウス・クワドリガリウスの手を経ている。かれは同名の氏族、クラッディウス氏の多くを歴史に登場させて、その氏の榮譽を飾った。リキニウス・マケルは思慮深く、果敢に富む、そして民衆的な政治家であったが、多数のリキニウス氏のメンバーを古い歴史にこっそりしのびこませ、いかに国民の権利の伸長がかれの祖先の功績に負うたか国民の目をひらかず一方で、クラッディウス氏の英雄的功績を顔色なからしめようとした。ウァレリウス・アンティアスも同様に、ウァレリウス氏をローマの歴史をはなばなく飾った大氏族として日の当る場所に出した。これらの年代記者のやり方は、かれらの前任者がいかに遠慮がちで不器用であったかと思わせた程である。これに対してリウィウスは読者にローマ史の全体像を物語ることも、原因究明することも、そもそも思索的な著作も示さなかった。思想家になるという要求をもたないかれは、サルスティウスの後継者というより年代記作者としてピソ、クラッディウス、アンティアスの後継者であった。

次に少しおくれて現れたクノッへの論〔7〕はクリングナーの議論をいっそう精緻にしたばかりでなく、ローマの歴史叙述の形成と性格に関する有益な論となっている。

そもそもローマ人は長い間出来事を歴史的に見て理解する意義を欠いていた。第2次ポエニ戦争に至るまでは、年代記のみならず碑文でさえも政治的・歴史的な内容が完全に欠けていた。最古のラテン語の歴史の史料、大神官の年代記は、食、奇怪な自然現象 *prodigia* とその清め、地震、疫病、神殿の奉献および、歴史的、政治的な出来事を記録したが、それらは祝祭や神官の職務行為の根拠となるように、神官の立場から作成された、都市ローマの公私の実用に不可欠の暦であった。確かにこのような暦を陳列し収集する慣習は古く存在したし、また政務官の年間行事表はすでに前304年に、本の形をした写しによって私的な用途に供せられたらしい。そして年代記の表を公けに陳列するという慣習は弟グラックスの時代に至るまで維持され、その当時に『大年代記』の名で記録の収集が公刊されたが、それは歴史の作品などと呼べるものではなかった。

大神官の年表の冒頭には執政官のリストが並べ置かれていて、この方式は遅くとも前4世紀から始まっていた。しかしこの文学以前の時代の作品は、歴史的な出来事を独立して記述した痕跡を認めない。前文学の時代の出来事を伝える独特の方法は、貴族家の私的な文書庫にあった記録である。これは葬送演説 *laudatio funebris* の習慣と結びついた家の伝承で、しかも自

己の氏族を讃美するために伝承が使われたことを示している。何が強調されるか、この見地から決められたので、そこには事実があったとしても、それは歴史的な目的からではなく、葬送演説に生の材料を提供するための保存であった。そのほかに凱旋将軍がその手柄を実名を挙げた碑文によって不朽にしようとした慣習があった。しかしこれも、ハンニバル戦争の最後の数年以後に、ヘレニズム時代のギリシア人の模範に従って行われるようになったにすぎない。事実最初の凱旋式の碑文は前179年に現れている。大カトとウェロは、古くローマ人が宴会で祖先の英雄的行為を讃えて叙事詩を歌ったと報告した。しかしキケロはそのような英雄叙事詩を1つも知らないと言っている。したがって非常に古い英雄叙事詩の存在は否定されるべきであるが、もしあったとすれば、新たに移住した家が偶然に残したものであろう。

ファビウス・ピクトルの功績は、歴史叙述を、いや歴史家の榮譽を確立したことにある。かれが歴史叙述を始めたのは、かれ自身がローマ国家の発展を歴史的な統一として意識的に体験したからであった。ファビウスのような初期の歴史家には、ローマの現在是有機体的に過去によって決定されていたという、新しい思考が共通して見られた。つまり最初の2回のポエニ戦争の困難を経験したこのようなローマ人の自覚が歴史叙述の形成に大きな役割をはたした。ファビウスはローマの先史時代と伝説的な王の歴史をかなり広範に扱ったらしいが、次の第1次ポエニ戦争の勃発に至るまでは素描であり、わずかに後からの挿入で補っている。最後の部分において最初の2回のポエニ戦争を、詳細かつ具体的に、そして信頼できる自己の政治的な経験に基づいて述べた。この不均衡な構成は、材料の多様性からくる不統一を示すものであった。またこのプラグマティックな歴史叙述は、国民的・ローマ的な観点から潤色されるという危険性をもった。大カトは、かれの死にいたるまで(前149年)を、『起源史』Originesに書き、単にローマ人の行為だけでなく、つねに成長するローマの歴史をほとんど型にはまらない、流れるように詳しく描いた。しかしそこにはイタリアの諸部族の太古の歴史、当時まだ未完のローマ人の歴史があり、かれの言明とは裏腹に、ギリシア人の歴史と古物愛好の影響が歴然としている。かれは法廷の演説やラテン語の官職用語を発展させたけれども、いわば無から創作したのであり、本質的な方法を欠いたという重大な欠点が内包されていた。

ローマ歴史叙述は大カトをもって第2期に入った。ラテン語はただ1つの叙述の言語に高められ、カッシウス・ヘミナやカルプニウス・ピソらの年代記者が、ローマに芽ばえた記録、大神官の年代記に拠って、ローマの初期の時代から報告を行った。毎年の始めに執政官が、ある場合にはローマ市の建設以来の年数が入念に書き留められた。だがローマの独自性を決定した諸力を明らかにし、透視する試みはずっと後退している。ヘミナの年代記は、古事を研究して過去の教訓を生かすことしか考えなかった。過去を道徳的な模範として復活させたピソは、大カトに多く依存したらしい。ピソは古い年代記の断片を保存しているが、歴史的な真実を求めることを課題とした優れた作品と思わせるものはなにもない。かれの歴史叙述は、ただ現在の効用に役立つ働きをしたとしか思われない。

ローマの歴史叙述の第3の時代はグラックス兄弟の改革後に始まった。しばらく前より、個人と国家、国民、民族との結びつきは緩んでいた。これ以来、歴史叙述は2つの党派、オプティマテスとポプラレスに奉仕した。このような党派政治的・傾向的な歴史叙述はスッラの時代とその暫く後に頂点に達したが、その目的は当然現在の直接の効用、つまりローマ史の叙述によって日常の闘争を強力に支援しようとする党派政治的・傾向的な歴史叙述が第3の時代の歴史家の特徴であった。ローマの歴史を古代から現在に至るまで叙述し、いまかれらが繰り広

げている闘争があたかも初期の時代にあったかのごとくみせて、敵の非常に古い罪を宣言しようとしたのである。

以上、クノッヘは、ローマの歴史叙述が始まったのはけっして早くなかったこと、ファビウス・ピクトルに始まった歴史にはプラグマティックな傾向があること、とりわけグラックス兄弟時代以後の歴史家は、党派の闘争に役立たせる目的をはっきりともって書いたと見ている。続いてクノッヘ〔8〕は古いローマの歴史叙述の特色が政治的、実用的、ローマ中心的であったことを長々と述べたのち、傾向的でもあったと論じている。

ローマの歴史家の視野は、*ab urbe condita* つまり「ローマ市建設以来の」政治的出来事の叙述に限定され、歴史家は実際的な目的から著作したので、歴史自体を明らかにすることから遠く隔たった。同様に大神官の古い年表は、日常の実際的な要求に奉仕し、貴族家の記録も実際にその氏族に奉仕したように、ローマの歴史家は歴史を過去のためではなく、ローマの現在とローマ国家の将来の福祉の増進を精力的に押し進めるために書いた。物事を恨みもなく、党派心もなく書くというタキトゥスのすばらしい確信は、あまりにも無邪気で文字通りに信じるわけにはゆかない。

ローマの歴史家は時を越えた論理的な目的を追求したのではなく、実際的な、現在に役立つ、愛国者の見地から、自分の経験という非論理的な見地から著作したので、その作品は客観的で粉飾のない歴史からは程遠くなった。例えばハンニバルなどのローマの有力な敵に正当性を与えることなど関心外で、つねにローマ人は正しいとする意図から多くの歴史を歪曲した。それは修辞の目的からではなく、祖国愛の動機から出た歪曲であった。ローマの過去はローマ人の現在と将来の正しい生活規範とならなければならないという見解をこれらの歴史家もったという主張は、反論もされているが、最古の歴史家に立証される。なるほどギリシアの歴史叙述にも愛国的な、模範的な見地は重要な役割を果たしたけれども、ヘロドトスがアテナイの国民のおそるべき敵クセルクセスの明るい面を公明正大に示し、トゥキュディデスがアテナイ国民の偉大さと矮小さを同じ情熱をもって正確に立証した態度は比較されるべきである。

古いローマの歴史家はほとんどすべて元老院議員身分に属する人たち、決定に参画を許された人たちであり、歴史は貴族門閥の野心的な嫉妬心から潤色され、故意に歪曲されさせられた。ファビウス・ピクトルはコルネリウス氏と対立するファビウス氏の一員として、ファビウス氏にできる限り多くの光りを当て、コルネリウス氏、とりわけスキピオ家の活動を抑えて書いた。このような立場と目的が歴史家の方法をも生み出した。ローマの古い歴史家は、組織的な研究を避け、過去を好ましいと思った伝承だけで再構成する一方、最新の時代は自分の知識と経験だけで構成したから、歴史の真実の研究家と思ってはならない。ファビウス・ピクトルは、初期の伝説を捏造はしなかったが、再現しただけであった。ローマの神話はかれよりずっと前に出来上がっていた。かれはファビウス氏の家の記録を動員して初期共和政の歴史を書き、ポエニ戦争の叙述では伝承とともに、かれ自身の体験と、成熟の域に達した人としてかれの経験をはっきりと語った。かれは学問的な研究者として叙述することも、その作品を歴史の記念碑とすることも望んでいなかった。

歴史家の重要な仕事である史料の捜査と収集という点でローマの歴史家は学問的に優れようとは考えなかったらしい。ラテン人の地方都市の歴史的な材料、いやローマ市の碑文さえも稀にしか活用されなかった。ファビウス・ピクトルがかれの氏族の記録を用い、キンキウスが捕虜になったカルタゴの陣營の見聞を利用できたのは、全く偶然であった。ローマ人の史料批判

の手段は、現在から見ると全く原始的である。リウィウスでさえ文書に基づく情報を得ようとして公的記録に当ることも、歴史に真実を求め、完全な史料収集と、その批判的な吟味を行なうという基本的な努力の跡もみられない。したがってポリュビオスの作品の影響を受けるまでは、歴史的な関連とか歴史的な諸力の探求も、最も大切な関心になることはなかった。歴史家は政治の実務経験者として自身が体験し、部分的には指導した事件の原因について十分な情報を得ながら、感情移入の能力がないため出来事の関連を月並みな図式として描いた。過ぎ去った時代を身を入れて考え事実の解明をしたのはサルスティウスがはじめてで、かれこそ偉大な革新者であった。しかし現存するローマの歴史の作品は、多様な意味をもっており、その作品は、古い歴史家がその一員であったローマの支配者層の理想をまれにみる完璧さでもって教えてくれるので、われわれにとってこのうえなく重要である。

以上のクリングナーとクノッへの主張は、まことに自信に満ちた、堂々たる議論になっているが、反論はないのであろうか。

### III

前130年ころの大神官の長ムキウス・スカエウォラによって80巻にまとめて刊行されたと言われる『大年代記』はどのような内容をもったか、はたして歴史家によって利用されたであろうか。この問題を論じたクレイク [8] は、『大年代記』に関する古代の証言を検討し、大神官は毎年、毎日の事件の記録を木の板に保存したこと、この記録は遅くとも前400年には始まり、表にしてレギア（王宮）に仕舞われていたので大カトなどは十分参照できたこと、この記録はムキウス・スカエウォラの時代まで続けられ、恐らくかれによって公刊され最終的な形が与えられた、と主張した。かれはまたそれより早い公刊の証拠はないし、『大年代記』として知られたのは、不完全ながらかなり信頼できる版か表自体の写しかもしれず、同様の材料は、初期の年代記者にも、キクロやその同時代人の手に入った、と論じた。これは古記録についての基本的な見解として受け入れられ、ペーシュェルの論文集 [23] にも独訳されて収録された。

リウィウスの典拠を詳細に追求したクローツ [9] は、リウィウスが参照した年代記は、後期年代記、つまり捏造記事によって内容を増やした、信頼度の薄い年代記、とりわけアエリウス・トゥベロであったという結論に達した。かれの見解は19世紀のニッセン [2] の議論をまさしく受け継いだものである。ニッセンは、リウィウスが1つの部分に関して1つの典拠しか選ばず、ただ1つの典拠によって説明したのであって、かれは異説を付録として加えたに過ぎないと主張していた。だがクローツの論文は、第2次大戦中に出たのでドイツ以外には広まらず、ようやく戦後になって英語圏でも読まれるようになったが、かれの議論は正確さに欠けるとして、全面的には受け入れられなかった、とバディアンは批判している [20]。

したがって、リウィウスの典拠はなにか、リウィウスは典拠に対してどのような態度をとったか、その後も議論は活発であった。

フランクより少し後れて、レイスナー [11] もまた考古学の成果を受け入、伝承に対する行き過ぎた批判を正し、初期の年代記者ピクトル、キンキウス、大カトなどはみな支配階級の一員であったから、討議し公文書を読み、起草することに慣れていたので、相当の量の公式記録を集めたにちがいないと見る。またローマ劫掠のさいの記録の焼失は考古学研究の結果から成り立ち得なくなると主張した。



考古学の成果を総括してアーケイック時代の根本的な再検討を提唱したフラッカーロ [12] はローマの歴史叙述の形成過程について次のように論じた。リウィウスはディオドロスの内容を薄めたり、後期年代記者はより読みやすくしたり、読者の関心を引くために追加したりしたことが、スプリウス・カッシウスの弾圧に関する両者の内容の比較から主張できる。つまりディオドロスは原典に非常に近いものを保存しているのに対して、リウィウスは、長い拡張作業の結果成立したものを伝えたと言える。リウィウスは前5世紀のローマ人は偉大で、賢明な人々であったと確信したが、このような確信で書かれた歴史は前1世紀の歴史であって前5世紀の歴史ではない、つまり年代記者の説明であって、伝承そのものとは言えない。ディオドロスやリウィウス以前にはさまざまな典拠があったが、ディオドロスは、簡潔でより古い史料を選び、リウィウスはたぶん新しい、複雑な過程を経て伝達された材料を選んだ。この想像上の年代記は、以前の古い年代記を拡大したものである。ベロソスが指摘したように、クラッディウス・クワドリガリウスは第3巻で、リキニウス・マケルは第2巻で、ピュロスについて語った。ファビウスもまた簡潔であった（3巻をもっておそらく前367年に達した）。カッシウス・ヘミナも第4巻ですでにハンニバル戦争に達した。前2世紀の年代記者についてはほとんど何も分からないが、大カトの『起源史』が全7巻でかれの時代まで達していた（うち2巻はイタリアの諸都市の起源に捧げた）、とするとやはり簡潔であったと思われる。古い年代記から新しい年代記への変化は、年代記者が記事を捏造して読者のために読みやすくしようとしたことから起こった。ローマ史を叙述と会話でドラマ化した最初の人々はグナエウス・ゲッリウス（第15巻において、ガリア人の侵入を述べる。リウィウスは5巻において、ディオニュシオスは14巻で語る）であり、その外にアンティアスなどの歴史家がいたが、結局前4世紀の中葉までのローマの歴史の分量は十分でなかった。わずかに信頼できるものがディオドロスに認められるとしても、すべてが正しいとは断定はできない。現存する前1世紀の年代記風記述は、当時最古のローマ史とみなされたとしても、実際の最古の歴史ではなく、復元され、年代記者によってドラマ化された歴史であった。

リウィウスの現存する部分は全体の約4分の1にすぎない。しかしラテン語で書かれたものとしては、もっとも長大であるだけに、現代の歴史家にとってその全体像を理解することは容易でなかった。このような状況の中で、リウィウスの全体像を示そうとしたウォルシュの著作 [13] は英語で書かれた最初のものとして注目された。かれはリウィウスとその典拠について論じ、ローマの歴史叙述がヘレニズム時代の悪くなったギリシア人の歴史に大いに影響されるなかで、リウィウスのがどのような特徴を発揮したか指摘している。

歴史叙述はアウグストゥス以前まで学者に固有の仕事とはみなされなかった。リウィウスのすぐ前の歴史家サルスティアウスとアシニウス・ポッリオは歴史を書く前に現役として国家に奉仕した政治家であった。このような歴史家は、参照する著作がない場合、自分自身の知識と判断力に頼って史料を評価する傾向があった。さらにローマ人は歴史の伝承が少ないことについて気を取られて、科学的な正確さより文学的に磨きをかけてギリシア人に対抗することばかり考えていた。しかしリウィウスはローマの歴史叙述をアカデミックな研究にまで高めた。かれには政治に携わった経験がなく、その才能もつばら文学にあった。かれ以前には良質の歴史叙述はなく、かれはローマの知識人に広まった歴史叙述の理論、つまり歴史の形と内容はどうかあるべきかについて、キケロを経て多数のギリシアの歴史家の見解を学んだ。だがそれはトゥキディデスの「科学的な規範」からは驚くほど退歩した歴史理論であった。すなわち前4-

3世紀に流行した、必ずしも真実と両立しない、効果ばかりを目指した「修辭的な」、称讚に値しないヘレニズム時代の歴史理論である。ヘレニズム時代の歴史叙述のもう1つの特徴は、歴史に道徳的な機能をもたせること、偉大な人物の生涯を述べて、読者にその行為を模倣させ、人類の道徳の向上に資するというものである。この目的観の影響を強く受けた大カトや、前2世紀の歴史家は、原初の記録に取り組んで歴史を書く、つまり年代記を書くことよりも、過去の事件を解釈する方を望んだのであった。前2-1世紀の後期年代記者が虚構の話しをためらいなく挿入し、不適當と思うものを訂正し、困惑を引き起こす事実を削除したが、それは自分の榮譽のため、ライヴァルを懸落とす動機からであった。前1世紀の年代記者ウァレリウス・アンティアスは古記録を再現することによって、その叙述に「ありそうなこと」を装うのに懸命になった。リウィウスは伝承を大切に、伝承が本当かどうかは別として、それを不朽にすることは重要なことだと信じた。かれは「それらを確認するつもりもなければ否定するつもりもない」と序言で述べる一方で、伝説を詳しく述べるのは、伝説には追求されるべき感情的な価値があると強調するからである。

したがって洗練された現代の研究者は、かれの以上の目的と規範に満足しない。リウィウスに経済的および社会的な要素の分析を求めても無駄骨を折るだけだろう。古代の歴史叙述は、トゥキディデス以来戦争の原因を人間の決定、思想、感情と結びつけて説明した。そこで重要な役割を果たしたのは、共同体の指導者、つまり決定を行う人々であり、歴史家には著名人の経歴と性格の説明が要求された。現代人の眼にはリウィウスの歴史がいかに狭い視野の中にあるか容易に理解できる。リウィウスの限界は、かれがほぼ750年にも及ぶ、しかも伝説的な過去をもち、世界征服を行い、国内の激しい内乱を経験した国家の歴史を選んだことであり、142巻を使ったとはいえ、大部分がローマ軍の歴史のパノラマ的な描写にならざるを得なかったことである。

リウィウスの歴史は、遠征の叙述、次に演説、最後に政務官職と神官職の任命、国家の祭典、夢と奇怪な自然現象の報告などが骨子となっている。かれは *tabulae pontificum* に遡る年代記の枠組を保存しているが、明らかにそれ以上ではない。だがかれはキケロが理想として熱心に説いた修辭学的な、イソクラテスの歴史を実際に示そうと努めたし、公平に関するかぎり、「怨恨も党派心もなく述べてみたい。私にはそういった感情を抱く動機はまったくないのだから」と言って胸に一物を秘めて書いたタキトゥスとはちがって、偏見のない成功例を示した。もっともかれはトゥキディデスの公平に近づけず、無批判な愛国心とローマの歴史の「父」ファビウス・ピクトルに始まった伝統的なローマ人の偏見からも脱脚していない。リウィウスは明らかに「偉大なローマ」という真面目な信念を抱いたが、ローマの偉大さを盲信したからで、かれの洞察力の不足のせいではない。ローマの歴史叙述によく見られた不公平、つまり共和政の最後の1世紀の政治的な激しい対立が反映した不公平はかれにも見られた。それまでに歴史は、反元老院派の関心からしばしば不器用に歪曲され、反民衆派の攻撃の武器として用いられ、多くの歴史家がまた真実を犠牲に個々の家の業績を讃えるために家の記録を利用したため、歴史はいっそう複雑になった。しかしリウィウスはそのような偏見に満ちた原典の材料を扱うさいに、無理のない公平な方向に舵をとった。かれは大衆支配の危険に完全に気づいたし、親元老院議員的な同情もしっかり根づいていた。そして現存の部分を見る限り反平民的な偏見の例が一つだけみられる。初期の土地立法を論じるさいに、前59年にカエサルが元老院の反対を押しつけて直接民会に提出した土地法においてかれの反護民官の感情がありありと見られる。つ

まりかれの政治的立場は明らかに親ポンペイウス派であった。

リウィウスに真実があるかどうかの問題に簡単に触れると、かれは偶然発見した典拠の中の材料に忠実であったが、しかしそれを表現するさいに、優雅さを増し、鋭敏な性格描写を心がけて二重の効果を出そうとしたために材料を変形したという非難は免れない。伝説的要素の多いはじめの方の巻においては別として、「序言」において初期の歴史について手に入った多くの伝説的材料を歴史的事実とみなしてはいけない、と警告している。

ウォルシュはリウィウスとかれの典拠との関連、つまりリウィウスは原初の公的な記録を参照しなかったという非難に対して「リウィウスは『大年代記』や元老院議決（両方とも本の形でたやすく手に入った）を参照することを怠ったこと、また文学的な伝承よりも他人によって供給された公的記録の証拠を、その信頼性を知っていても重く見るのを怠ったという非歴史的な態度を残念に思うことができるかもしれない。かれのこれらの怠慢を情状酌量して、われわれはかれが従った伝承はそのような科学的なアプローチを無視する傾向にあったと心にとどめなければならない。」と非はリウィウスよりも伝承にあった、と言っている。

#### IV

「ローマの起源」をめぐる研究史を詳細に回顧したモミリアーノ [15] は、ディオドロスの典拠は前2世紀のローマの歴史家たちで、リウィウスとディオニュシオスは主として前1世紀のローマの歴史家に依拠したとし、かれらは古い時代についての原史料として、『大年代記』、民間伝承や貴族家の伝承、前509年ころより存在した政務官のリスト、宗教的な行事暦、条約の本文と法などの記録、ギリシア人・エトルリア人の歴史家の本文、絵画と彫刻など数多くのもので利用できたのは間違いないと論じた。ブルク [15a] はまたローマの初期の歴史についての現存の知識は決して乏しくない、と認めている。しかしローマ共和政の成立期を手広く扱ったヴェルナー [14] は、とりわけ執政官表の信憑性の議論に見るべきものを示し、前470年代までのほぼすべての執政官を後世の挿入として退ける極端な見解に到達した。またアルフェルディ [16] は伝承をほぼ承認するものの、王政の転覆から共和政の発足までの歴史はすべてピクトルの捏造とする独創的な説を立てた。リウィウスの注釈書としては、第5巻までながら今世紀になってはじめての試みであるオウグルヴィー [17]、論文では、共和政の発足直後の内外の難局に直面した時期を歴史叙述がいかに描写したかを詳細に比較分析したトレンクレ [18] が出て、初期ローマ史の研究もリウィウス研究もいっそう多彩になった。

オウグルヴィー [17] は序論においてまずはじめにリウィウスの叙述の態度、かれの典拠について次のように述べている。

リウィウスの第31巻以後の典拠についてはポリュビオスが残っており、かれがどの典拠をどのようにして使ったか、分析は可能であり、その結果をたぶん第30巻以前の部分についても適用することができるだろう。すなわちリウィウスはポリュビオスを重要な典拠としたが、ただ書き写しをし、部分的に変更を加えたにすぎなかった。リウィウスは主要なテーマを述べるとき、1つの説明を受け入れて採用したのち、ときには異説を挙げたり、別の説明を引用していることは明らかに認められるけれども、それは歴史家によくある学問的な術学の域を出なかった。かれは研究に関心がなく、『大年代記』を直接参照したこともなく、碑文にも直接当ることなく、すべて間接的な引用で間に合わせた。またウァロの著作を参照しなかったことが明ら

かであるように、かれは原典の研究に従事したことはなく、歴史の探求にも関心がなく、歴史を書くという目的のためには単に材料を提供すればよいと考えたらしい。かれはどんな場合にも1つだけの典拠に従ったように思われる。

リウィウスの典拠はなにであったか、オウグルヴィーはリウィウスの典拠とその特徴を次のように説明する。

「最古の典拠」と大げさに言っているが、実のところかれはファビウス・ピクトルとピソを引用しているだけで、しかも前者のギリシア語には十分親しんでいなかったし、後者は直接参照されなかった。主要な材料はウァレリウス・アンティアスの歴史から得られたからである。かれは主に最近の歴史家、ウァレリウス・アンティアス、リキニウス・マケル、アエリウス・トッペロを典拠とした。1-5巻から受ける印象は、リウィウスが歴史を叙述するにさいして2つの主要な典拠しか採用せず、それらを交互に使ったということである。それはリキニウス・マケルとウァレリウス・アンティアスである。

リキニウス・マケルはファビウス・ピクトル、ピソのようにまず第1に政治家であり、副業として歴史を書いた。かれの政治的な立場はマリウス派であり、スッラに対しては激しい敵意を抱く、断固たる態度の政治家であった。『大年代記』公刊後に著作した歴史家はだれでも独創的でなければならず、リウィウスがリキニウスやウァレリウスに基づいて改善を加えたように、リキニウスは前130年ごろの著作家、グナエウス・ゲッリウスの歴史を基礎にかれ自身の付加を行って歴史を書いた。リウィウスがリキニウス・マケルを典拠に選んだ理由は次のようなものであったと思われる。第1に、リキニウスは元老院の権威を認めたものの、独宰官、執政官の選出、戦争と平和の問題の決定など主権は国民の手にあり、そのために国民は統合され組織されると同時に、強力で責任ある、「自由に対して最も鋭い武器」護民官によって指導されなければならないという哲学をもっていた。第2に、とりわけリキニウスは制度を独自の政治的な考えで解釈し、官職を詳しく調べている。第3に反教権主義、つまり宗教的な儀式を政治的に、そして合理的に説明している。第4にイタリア人の都市に関心があったことである。その動機はスッラによる諸都市の抑圧から発していたが、大カトを思い起こさせるイタリア各地の都市とそこで起こった古事を研究している。たしかにリキニウスはその同氏族の過去の栄光をはなばなく飾ったのみならず、友好関係にあったファビウス氏に特別の関心を示し、5世紀に正しくない人物を持ち込んだり、新しいエピソードを過去にあったかのごとくでっちあげたりして歴史家として偏見に満ちていた。このようにリキニウスは、民衆派の態度と信条からくる偏見に満ちているという欠点をもっていたけれども、これがかれの歴史を新鮮で興奮させるものにし、リウィウスによって典拠として採用される原因となった。

ウァレリウス・アンティアスの歴史は、数の誇張とメロドラマ風の脚色に特徴があったということとはほぼ間違いない。かれはカルプルニウス・ピソの『大年代記』から編さんした歴史を基に自分の歴史を構成したことは間違いない。かれはリキニウス以上にはすでに同氏族ウァレリウス氏に取り入った。最初の執政官ウァレリウス・ポブリコラをはじめ、不自然なほど多数のローマ史上の「最初の人、ウァレリウス」を主張した。そのほかにもアンティアスの追従によって幾つかの氏族が前470年代に活躍したという名誉を与えられた。マケルとの違いは、その政治的同盟者を挿入したのではなく、イタリア出身の有力な第1の世代、つまり同盟市戦争とスッラの立法によってローマ市民権を得た人々に名誉を与えたことである。これとかれの故郷の都市アンティウムがマリウスの劫掠に遭ったことから、アンティアスはスッラの擁護者で讃

美者になり、反マリウス派であったと断言できる。リウィウスがかれを典拠として選んだ理由はアンティアスの叙述が詳しく豊富なことと好奇心の強さにあったと思われる。

最後に、第3の典拠と考えられるアエリウス・トゥペロは、トゥキュディデスの影響を強く見せたのは間違いないとしても、かれはトゥキュディデス風にうわべを繕ってアンティアスの歴史を作り替えた可能性がある。その場合リウィウスはトゥペロを介してアンティアスを引用したと考えられるが、事実はむしろ逆で、アンティアスがリウィウスの主要な史料であって、トゥペロは広く用いられなかったと考えられる。

オウグルヴィーはリウィウスがリキニウス・マケルとウァレリウス・アンティアスを主要な典拠として使ったことを認め、2人の歴史家のさまざまな欠点を指摘した。リウィウスはこれらの典拠をどのような態度で用いたか、オウグルヴィーは明確には述べていないが、リウィウスが批判的な歴史家であったとも言っていない。マケルはマリウス派で、アンティアスはスッラ派、リウィウス自身はポンペイウス派（ウォルシュ [13] の主張）であったとすると、このような党派関係はリウィウスの歴史にどのように影響しているだろうか。2人を同じように扱ったリウィウスには政治的な偏見がなかったのであろうか、それともリウィウスは何でもよく手に入った史料をてっとりばやく使ったにすぎない歴史家であったということだろうか、これらの問題は依然として解決されていないように思われる。

トレンクレは、共和政開始後の激動期の歴史に登場するユニウス・ブルトゥス、ウァレリウス・ポプリコラ、ホラティウス・コクレス、ムキウス・スカエウォラ、クロエリアの挿話を検討してリウィウスの歴史叙述の特色を次のように述べる。

かれの控え目な表現はピソのものと思われる。リウィウスはピソに多くを負ったと理解できるが、ピソならびにディオニュシオスと異なる点がある。クロエリアの騎馬像を建立したのは、彼女が逃亡させた婦人の父たちでなくローマ人であったと述べて、かれは共同体のために行われた偉業に報いることは市民全体の課題であるという自分の感情を表した。この種の私的な栄誉は前2世紀ないし前1世紀においては普通のことであっても、前6世紀のローマでは考えられない。ここにリウィウスの物語的な創作が認められる。要するにリウィウスの共和政開始直後の叙述には、後期年代記の歴史叙述を主たる典拠とし、ときにそれより古い年代記の表現も受け入れるが、その叙述は控え目で、慎重であった。英雄譚を華々しく語る時も、物語の内面を変えて愛情に満ちた穏やかさと温和さを添えることを忘れなかったのがリウィウスであった。

トレンクレはリウィウスがスッラやカエサル時代の年代記をいかに慎重に遠ざけたか強調している。つまりここでもクローツが主張したリウィウスの典拠、アエリウス・トゥペロという考えは否定されていると見てよいだろう。

さて、ローマ人には飢饉や天変地異を克明に記録する習慣があった。この奇怪な自然現象 *prodigia* と総称されるものが、リウィウスにおいてどのように扱われたかを調べたローソン [24] は、グラックス兄弟時代に『大年代記』が刊行されるやただちに一部の歴史家によって使われたという広く受け入れられた見解に反論した。彼女はリウィウスそのほかの歴史家が伝える奇怪な自然現象は不完全なもので、その出処は『大年代記』ではありえない、むしろ現存する『大年代記』の断片は本の形で刊行されたことはないと言って、クレイクに反論し、何等かの原因で『大年代記』は年代記者や古事愛好家の利用が妨げられていた、少なくともローマ人は『大年代記』を初期の歴史の唯一の史料として使わなかったと結論している。ローソンは

はっきりと言っているはないが、歴史家は『大年代記』を使わずに、自由に歴史を創作したことを認める立場に立つと思われる。

このように依然として根強い「酷評家」に対する痛烈な批判が、ユールゴンによってなされ [26, 27], この問題が新しい観点から論じられたのは注目に値する。

「酷評家」の破壊の仕事は、セルウィウス制度の古い起源と、ローマ・カルタゴ条約の年代の古さの確認を前にして崩れたとし、以外にも考古学は伝承とそのクロノロジーが正しいことを明らかにした、とユールゴンは考古学の成果を強調する。

イタリアとシキリア島でのミュケナイ人の輸入品の発見、パラティウム丘における前8世紀の小屋の発掘、カプアにおけるヴィラノヴァ文化の発見は、ローマの建設、カプアの建設(前800年ころ)、エトルリア人王の支配などの伝説的年代を確認する。ピュルジのエトルリア語・ポエニ語の碑文は、ポリュビオスの第1回ローマ・カルタゴ条約の年代の正しさを明らかにする。ラウィニウムにおいて発見されたカストルとポリュックスの献堂は、レギッルス湖畔の戦いに伝説的な挿話を添えたディオスクロイの祭祀がマグナ・グラエキアからラティウムに輸入されていたことを確認する。

伝承がすべて正しいと言えないにしても、伝承の捏造は公の利益を満足させるためか、私的な利害を満たすためか、明らかにしなければならない。リウィウスもディオニュシオスも厳密な基準を欠いたかもしれないが、かれらの根本精神は公正であったと認められる。リウィウスもディオニュシオスも、正しい歴史を求めて記録と格闘した。ディオニュシオスが「青年時代に」アウエンティヌス丘のディアナ神殿の青銅碑文を見たと言ったのは、セルウィウス王のとき、神殿をローマ人とラテン人の連邦の聖所とする決議とそれに参加した国民の名が刻まれた碑文をローマ滞在中に実際に見たのである。リウィウスが「古風な文字と言葉で書かれた」プラエトル・マクシムスの釘打ちを定めた法を語る時、前83年のカピトリウム大火災以前にそれがあったことの確認になる。かれは古事愛好家キンキウスの著作、当時の『バーデカー』に当る『ミュスタゴジカ』 *Mystagogica* から写したからである。それらの偽造を後期年代記のせいに行うことができるか。スッラ時代の年代記者は当時のセンセーションに餓えた、盲信的な大衆の要請に答えたのであろうか。クワドリガリウス、アンティアス、マケルは伝承の最悪の偽造者であり、クラッディウス氏、ヴァレリウス氏のために手柄をでっちあげたのだろうか。ファビウス・ピクトルも事実の変更という伝統的な仕事に従ったという評価がある(ハネル)。他方でピクトルはギリシア風のローマ史を書く努力をし「確実で称讃に値する客観性の印象」を与えたという見解がある(モミリアーノ)。ピクトルを歴史叙述の最大の破廉恥な嘘つきと力強く宣言したアルフェルディ [16] は捏造の全責任をピクトルに帰した。しかしこの「無からの創作」は決して当たらない。ピクトルはなかならず組織者であり、既存の伝承を使える形にした人であった。

ローマには、大神官の年代記、非常に古い『婚礼の歌』(先祖の栄光を讃える氏族の祝宴の歌)、アーケイック時代のローマの幾人かの人物、たとえばホラティウス氏などの英雄的行為で有名な人物が存在した。年代記者がそれらすべてを捏造したとは言えない。それに初期ローマの歴史は、インド・ヨーロッパ語族から相続した神話、王の人格、そしてタルペイア、ホラティウス・コクレス、ムキウス・スカエウォラの伝説的な英雄の人物の伝承に満ち、事件本位の歴史というよりは、一層深い事実に起源をもつ古くからのラテン人の集団的な記憶であった(デュメジル)から、勝手な捏造は許されなかった。

執政官表の信頼度について、ベロッホ [3] はローマ史の基礎をこの表の証言に置き（前5世紀の平民の名を挿入と誤って考えたが）、フラッカーロ [12] も執政官表は最もはやい、最も重要なローマ史の記録と認めた。アルフェルディ [16] でさえローマの歴史の堅固な基礎は共和政の執政官のリストの中に見いだされ得ると認めた。したがって前5世紀のファビウス氏の連続7回の執政官職が前4世紀の同様の例から思い付いたもの（パイス）という見解は受け入れられない。執政官表は堅固な基礎をもっていると認められる。前485年から前470年まで平民の名が消えたのは、貴族層の閉鎖化（デ・サンクティス）をはっきりと示し、重大な危機とそれを抑えたファビウス氏の登場の意義を明らかにしている。平民の名と同時に、一時的にエトルリア人の名（ヘルミニウス氏、ラルキウス氏とアクィリウス氏）が消えたことも、ファビウス氏の反エトルリア政策（ウェーに対する執拗な戦争）と無関係ではなかっただろう（ウォルムニウス氏が前461年になって執政官職に再登場した）。以上はローマの歴史叙述を今世紀の始めとは少し異なる角度で解釈したものであるとユールゴンは締め括っている。かれの議論は、リジャール [50] によってベロッホが陥ったラディカルな悲観主義から脱却しているよい例と評価された。

## V

リウィウスは確かな史料を典拠にして歴史を書いたか、史料批判の態度は十分であったか、こういう議論はこの後も跡を断たなかった。リウィウスは第1級の史料を使わなかった、つまりピクトルなど初期の歴史家の著作を直接引用しなかったとか、典拠に対する無批判などが指摘されている。クローツ [9] のリウィウスの典拠に関する詳細な研究以来、リウィウスが参照した年代記は、後期年代記、つまり捏造記事によって内容を増やされた、信頼度の薄い年代記、とりわけアエリウス・トゥベロというのが根づよい見解としてあった。しかしパーディアン [20] は、クローツに対する反論はその論がでた直後にあったと言っているし、今やかれの見解はほぼ退けられたと言っよいであろう。けれどもリウィウスの典拠として夙に有名であるアンティアスをどう考えたらよいであろうか。ローマの歴史叙述の最新の概観を行ったフラッハ [49] は、アンティアスについてはきわめて簡単にふれているだけである。かれは強いて取り上げるに値しない歴史家というのであろうか。

しかしリウィウスの歴史叙述の態度を擁護する論は依然として多い。英語で書かれた、最新の、最も重要なリウィウス研究という評判の高いルース [32] は第31巻以後のリウィウスの叙述態度について次のような論を展開した。かれがポリュビオスを称讃し、使用したのは、真面目で実用的な歴史への深い関心があった証拠である。それにかれの仕事は入念でエネルギーを集中させなくてはならなかった。大規模なローマ史の叙述は大量の史料を広範に読むことを要求したからである。かれは完全でそして信頼できた史料を用意し、その目的に適したより短い説明しか用いなかったことから、かれがファビウス、キンキウス、ピソを無視していないことが分かる。もちろん同時代の証拠が存在した時期の歴史を書くときはそれらの証拠を直接参照した。ポリュビオスを含む初期の歴史家や生き残った演説や弁論を用いた。同じくリウィウスの第31巻以降の典拠としての後期年代記を擁護したティンベ [35] もまた、リウィウスは不幸にして後期年代記者を用いざるを得なかったが、年代記に真理愛がないと異議を呈したのはリウィウスであるからその公平な態度は認められる、と言っている。

ところがリウィウスの全体像を手際よく紹介した有益な手引き書ウォルシュ[29]や初期ローマ史の総括的な手引き書を書いたオウグルヴィー [30] は依然としてリウィウスの歴史叙述の態度について厳しい態度を堅持した。ウォルシュは次のように主張している。リウィウスは最初の10巻において、アンティアス、マケル、トゥペロ、クワドリガリウスなど、前1世紀の権威あるラテン語の著作家を用いたが、場合によってはグラス兄弟以前の年代記者、ピソやピクトルも参照したのは明らかである。しかしかれはピクトルの名前を挙げるか、「最古の典拠」という呼び名で引用しているから、おそらくアンティアスやマケルを通じて間接的にピクトルに接したであろう。リウィウスが最初の10巻においてローマ初期の伝説的な歴史を書くことに決めたのは、多分に愛国的な自尊心とアウグストゥス時代の古物愛好趣味からであったが、最初の部分を真面目な歴史と見ないよう読者に十分警告を与えている。オウグルヴィーも次のような論を展開した。リウィウスが官職を帯びず、元老院と政務官職から排除されたことは、元老院の会議の議事録、条約の本文、法、大神官団の記録などに直接当ることを不可能にしたばかりでなく、政治的な用語で歴史を説明する気さえ起こさなかったために、かれの歴史には重大な結果をもたらされた。かれの歴史の目的は、祖先の政治と戦争、権力を獲得し拡大した手段、次に道徳的な衰退の過程を述べることで、悪徳がはびこる現代とその暗闇を見つめること、という序言とは反対に、かれはただ、詳細に書くことのできる歴史叙述をもっていることだけで満足した。初期の歴史、確実には前100年までの歴史について、かれはより最近の歴史家を選び、その材料を単に再形成し書き直したにすぎなかった。リウィウスは、その史料の中の対立、偏見に気づいたが、それを解決する必要も、可能性も感じなかった。古い時代の分かりにくいことを不確かにおくという態度である。リウィウスの目的は一連の意味のある場面を構成することであった。かれは修辞学の教育を受け、演説の構成法を学んだから、叙述は短くなければならない、不必要な前置きや逸脱に入ってはならない、分かり易くなければならない、そして事実の上でもクロノロジーの上で一貫性がなければならない、事実を行為者の性格に合わせねばならないなどを歴史叙述の態度とした。こうしてローマ史の大量の出来事を意味あるものにしたが、そのため挿話を一貫性あるものにしようとして、主要人物の性格を創作したり、記録の削除や関連のない事実を気まぐれに結びつけたりした。かれは演説を使って歴史上の人物を生き生きと描写し、叙述を信頼できるものに見せることに成功したようであるが、われわれはそれだけに多くの意識に上らないごまかしに用心しなければならない。リウィウスやディオニュシオスによって語られた叙述に時代錯誤や潤色の跡がないかどうか容赦なく検査しなければならない。そうして残ったものが別の文学的な史料ないし考古学の助けを借りて新たな再構成を可能にする核心となるだろう。

クリスト [25] も次のように述べてリウィウスに対する厳しい評価の立場を捨てていない。リウィウスは史料の分析と批判という現代の意味の歴史研究を目的にしたとしても、手元にあった典拠に従って釣り合いのとれた、調和する叙述を目的としたので、すべてはこの典拠の質に左右された。リウィウスは第4と第5の10巻の叙述をポリュピオスだけでなく、広範に後期年代記に従ったので、その叙述はいつも歴史的に信頼できるとは限らない。

古い歴史家と現存の歴史叙述に対してその信頼性をもっとも厳しく批判したのはワイズマン [28] である。かれはローソン [24] のローマの歴史家は実際に『大年代記』をほとんど用いなかったという見解を「画期的な研究」と評価し、執政官職と凱旋式の完全な記録が手に入ったのは前130年ころのことで、それまで歴史家が使える史料はきわめて乏しく、したがってグ



ナエウス・ゲッリウスやウァレリウス・アンティアスなどの分厚い著述は、大部分が想像上のローマの歴史であったと主張した。しかしこのような主張はプリスコウ [33] とコーネル [36, 44] によって反論された。コーネル [44] は『大年代記』80巻がスカエウォラによって刊行されたとは確認できないこと、この年代記に関して知られる唯一のことは、年代記を保存するという習慣はかれの在職中に終わったのであって、これは年代記に対する熱狂の証拠というより無関心の証拠である、と言う。さらにコーネルはフライヤー [26] の『大年代記』がアウグストゥスによってかれの「大神官の長」就任（前12年）の直後に刊行されたとの主張を退けて、この理論は説得力がなく、余計であるとも言う。ワイズマンはコーネルの批判 [44] に対して反論を試みたが [48]、両者による論争はあまり発展しなかった。われわれは次にコーネルの議論を見てゆかねばならない。

コーネルのローマの歴史叙述の形成の過程を論じた3つの論文 [38, 51, 54] は、ローマの最初の歴史家たちの卓越性を示すような事実はないし、他方、リウィウスとディオニュシオスの独創性を過小評価すべきではなく、とりわけリウィウスは歴史家として高く評価できるという注目すべき議論を展開している。まず [38] を取り上げてみる。

古い歴史家がアーケイック時代を扱った方法について基本的な情報はディオニュシオスである (I 6, 2)。かれによると「ピクトルとキンキウスは自分の時代については目撃した経験をもとに詳細に述べた。しかしローマ市建設 (*κτίσις τῆς πόλεως*) 以後の古い出来事を大急ぎで要約する方法で扱った。」これはディオニュシオスがピクトルの著作にはアーケイック時代全体の歴史叙述が不足していたけれども、ローマ市の建設と、それに先立つ時代の事件は豊かにあったと語るものである。なぜなら「都市の建設」は王政時代全体を含むものでないことが、プルタルコスのピクトルからの引用、すなわち「サビナ人の略奪はローマ市建設の4ヶ月後に起こった (*τετάρτῳ μὴνὶ μετὰ τὴν κτίσιν*)」とタウロメニウムの碑文（ピクトルの作品の最初の部分を要約し、マンガナロの復元 [28] によると、「ピクトルはヘラクレスのイタリア到着とそして [碑文の欠] アエネアスとラティヌスとの同盟を調査した。程なくしてロムルスとレムスが生まれ、ロムルスによってローマ市が建設され、かれが最初に支配した」、と読める。この碑文は、伝説に関するファビウス・ピクトルの強い関心を証言し、ローマ市の建設とそれに先立つ事件についてのかれの物語を際立たせている点において重要である）によって明らかであり、ピクトルとキンキウスはロムルスを別にしてローマ市の建設後に起こった事件を要点だけにしぼって過ぎ去ったと結論できるからである。

コーネルのこの主張は、共和政の最初の時代に関する年代記は王政時代に比べて、質的にも量的にも貧困な内容であったこと、したがってディオニュシオスの歴史やローマの第2の世代の歴史家の著作は、修辞によって大規模に膨らまされたことを明らかにし、従来の意見を修正した、とリッシャー [40] は高く評価している。コーネルはリウィウスがアーケイック時代を詳しく述べなかったわけを以下のように言っている。

リウィウスは最初の巻においてもっばら王について述べ、次に第3巻において10人官職を、第5巻においてガリア人による大火を、第16巻において第1次ポエニ戦争を述べた。この規則正しい漸進的拡張の構成はリウィウスに独特であり、グナエウス・ゲッリウスと違っている。しかしディオニュシオスはグナエウス・ゲッリウスと同じ分量をもったと推測できる。ゲッリウスは15巻をガリア人の侵入に至る時代に当て、ディオニュシオスは同じく13巻を捧げた。リウィウスは5巻だけである。リウィウスは王政の崩壊を第1巻で終えたのに、ディオニュシオ

スは第4巻である。リウィウスは10人官職に至るまでの事件を3巻ですばやく過ぎ去っているが、ディオニュシオスはそれを10巻で扱った。目立つ点は、リウィウスが10人官職と第1次ポエニ戦争との間をディオニュシオスよりも長く扱ったことである。すなわち10巻に対して12巻である。ディオニュシオスはガリア人による大火から第1次ポエニ戦争に至る時代に7巻を捧げたけれども、リウィウスは10巻を費やした。アンティアスは王の時代について、リウィウス以上に多くを書いた。冗長な第2の世代の年代記は、先立つ歴史家が手短かに扱ったテーマを拡大したと思われる。しかし王の歴史よりも初期共和政を豊かに膨らませる試みはなかった。時間の経過につれ歴史が豊かになるのは、自由にできる情報がより豊富でより確かになったことを確認するものであり、リウィウスの歴史の信頼度はそれだけ高いと言える。ガリア人の大火による記録の焼失を言っている。しかしアーケイック時代の伝承が十分存在したことが、王の時代は前300年以前の共和政時代と比べピクトルや大カトやピソのようなより古い歴史家によってかなり詳細に扱われたことをかれは知っていたに違いない。事実リウィウスが言及した記録はすべて前6世紀ないし前5世紀の前半に遡るからである。たとえば、アウエンティヌス丘のディアナの神殿の聖法、カビーとの条約、最初のローマ・カルタゴ条約、カッシウスの条約、12表法などである。しかし12表法後の約1世紀はこの種の記録をもたないから、ローマ大火によって記録が破壊されたというのは正確でない。大火後の数十年は、ローマ史全体のなかでも曖昧な時代であり、先行する時代より記録が多くあったとは考えられない。

以上のように、コーネルは考古学の成果が、伝承の正しさを確認したばかりでなく、ローマ史とローマの歴史叙述についての従来の見解を一新するほどのめざましい成果をもたらしたとして、次のように新しいローマ像を提唱している。

伝承はタルクィニウス家の時代のローマを壮大な城壁、印象的な神殿などの公共建築物を備え、広い領域とラテン人に対するある種の覇権とカルタゴおよびギリシア世界との通商と外交関係を維持し、政治制度の洗練された組織と大規模な軍隊を擁した強力な国家であったことを知っていたに違いない。「タルクィニウス家治下の偉大なローマ」はアルフェルディによってピクトルが偽造した神話であると主張されたが、これはまったくの誤りであることが考古学の成果からも確認できる。ローマの都市発展の最初の痕跡は前7世紀の末で、前6世紀と前5世紀の初頭に神殿建設の著しい進展を見た。またラウィニウム、サトリウム、ガビーの発掘はラテン人などが並行して巨大な聖所を発展させたことを明らかにし、同時に前484年までのローマの一連の神殿の建設を語る伝承（フォルトゥナ、マテル・マトゥタ、アウエンティヌス丘のディアナ、ケレス＝メルクリウス＝サトルヌスの3対神、カストルとポリュックス、その他）、新しい祭祀の吸収（たとえばディオスクロイ）そしてラティウムにおける聖所の奉獻（アリキアの森）を語る伝承に信憑性を与える。St Omobonoにおいて発見された神殿の最初の局面は、前6世紀の後半のセルウィウス王の治世まで遡った。その他のとりわけ伝承に密接な関係がある発見はラウィニウムにおけるディオスクロイの献堂とポプリオス・ウァレシオスという人物の名をもつサトリウムの碑文である。これに対し、続く時代は考古学上の記録は貧困が明らかである。この種のデータは前5世紀後半のラティウム全体に欠けているから経済的な繁栄と政治的な成功はともに後退したのは明らかである。その理由は近隣のサビナ人、アエクイ人、ウォルスキ人の侵略と身分闘争の歴史に反映された経済・社会的な難問と関連していた。ローマの歴史叙述は、王政時代の伝説的な叙述や共和政初期の詩的な物語（モミリアーノ）よりも、物語的な歴史は王政から共和政の移行期に集中したという特徴をもった。ルクレティア、ブル

トゥス、ホラティウス・コクレス、クロエリア、そしてレギッルス湖の戦いの伝説はすべてタルクィニウス・スペルブス没落のテーマに関連している。この時代はローマの英雄時代であった。そしてローマは前6世紀の終わりに権力と繁栄の頂点に達し、勢力はその後急速に失墜した。こういう歴史は前3－2世紀の歴史家によってどこまで自覚されたか。たしかにある一部の歴史家は「タルクィニウス家治下の偉大なローマ」の観念をもったらしいが、続く時代が衰退の時代であったと自覚した歴史家はいなかった。少なくともリウィウスは前5世紀の政治の危機的な衰退を知らなかったらしい。かれがその歴史のなかで「ローマ史」の漸進的な発達の中絶があったと明瞭に言及したのを見ることはできない。むしろアーケイック時代と前3世紀後半との完全な連続が想定されている。「ローマの中世」と呼ばれるものは、自覚されなかった。このような状況はいわゆるギリシアの「暗黒時代」の状況に非常によく似ている。古典時代のギリシア人はかつて曖昧模糊とした時代があったとは考えず、かれらの世界は英雄時代の直接の連続であったと信じた。トゥキュディデスが「ミュケナイ世界」の存在を全く自覚しなかったように（スノッドグラス）、前2－1世紀のローマ人は、かれらと切り離された時代としてのアーケイック時代は考えなかった。したがってローマの歴史家は直面する問題の性質を知らずに遠く隔たった過去を再構成した。かれらは中心となる事実のまわりには全く不適切な要素を加えて歴史を述べた結果、アーケイック時代の政治闘争、社会闘争、経済、戦争などは、前3－2世紀にふさわしいものとみなしたので、その叙述は時代錯誤の性格と様相を帯びた。したがってローマの歴史叙述は不誠実からではなく、問題の性質を部分的にしか理解しない人々によって形成されたと言える。

コーネルの結論はローマの歴史叙述に信頼を寄せることができるといっていわゆる「酷評家」の極端な懐疑主義を一掃するものであるが、同時に前2－1世紀の歴史家は必ずしも正しい歴史を伝えたのではないと言って、歴史叙述の問題性を鋭く衝いていると言えるだろう。つづいてコーネル〔41〕は、まずピクトルなどの初期の歴史家が利用できた材料は決して多くはなかったが、かれらはすべて元老院議員、つまり当時の支配階層の一員であり、その歴史叙述の態度は極めてまじめであったのに対し、後期の年代記的な歴史を書いた歴史家は、史料にめぐまれていたのに、前代の歴史家とちがいで政治に関わらず、真剣な歴史を書こうという意欲もなく、きわめて墮落した歴史であったという従来の見解に反論する。

これらの歴史家が手に入れたと言われる『大年代記』80巻の刊行があったかどうかは不明である。たしかにキケロは『弁論家について』において、最も早い歴史家たち、ピクトル、大カト、ピソは年代記の手法で書いたので『大年代記』を利用できたと、主張している。しかし多くの歴史家が記録による証拠が終わるところで偽造を始めたとなると、そもそも年代記と捏造とは結びつかない。リキニウス・マケルやウァレリウス・アンティアスなどは歴史的事実を意識的に捏造し、事実がないときは想像力を働かせて歴史を大規模に偽造したと糾弾された。歴史の歪曲は、歴史家の政治的・社会的な地位の低下と関連していたかのような議論があったし、前1世紀の年代記者は対外関係に盲目であったとか、真面目な政治的・倫理的目的を欠き、読者を喜ばせるため、無節操に歴史を変え、必要なときにはいつでも偽造した、と言われてきた。しかしこれら後期年代記者は歴史の捏造をためらわず行ったような質の低い歴史家であり、リウィウスもまたかれらに簡単にだまされたという見解は受け入れがたい。これらの後期年代記者は不幸にしてリウィウスの主要な史料になった。しかし年代記者の貢献をあまり強調したり、その役割を甚だしく誇張してはならない。年代記者は好きなものはなんでも自由に捏造できた

こと、そしてリウィウスは、必ずしも利口ではなく、また非常に良心的でもなかったので、年代記者の嘘を知らず知らずにわれわれに伝えた、と推測されたが、捏造と嘘は必ずしも年代記者の責任ではない。たとえば、ホラティウスと橋の物語は、伝説的・愛国的な虚構である。またラルス・ボルセンナが実際にローマを占領したという異なる伝承は信頼できる。しかしホラティウスの物語は伝説であって、捏造かどうか論じても無益である。アンティアスは初期のウァレリウス氏の役割を誇張して伝えた、と裏づけできない。アンティアスの説明がウァレリウス氏に有利であったとしてもけっして驚くべきことではないだろう。アンティアスは氏族名を分かち合う偉大なパトリキ貴族家の功業を物語ることに代理人としての喜びを感じた、としても、かれがウァレリウス氏に関する材料を捏造したとか、そもそも誰かが捏造したと証明はできない。プロウォカティオ権についてのウァレリウス・ポプリコラの法をアプリオリに拒否する十分な理由はない。プロウォカティオ権の存在は、12表法から推定できるからである。サトリクムの碑文もまた共和政の開始時のウァレリウス氏の重要性を信じさせる十分な働きをしている。共和政末期には、公的な知識というものがあり、これは初期の歴史家によってはっきりと述べられた。歴史叙述の構成要素は確実に執政官表に基づいた。後期の著作家はこれらの定まった伝承から極端に離れることはできなかった。アンティアスが正直者だったわけでもないとしても、「だまされやすいリウィウスをだました」のであろうか。アンティアスの説明が他の史料と比較して誤っていると認めたのはリウィウス自身であり、かれは信頼できないという印象をリウィウスはもったようである。キケロ、ディオドロス、リウィウス、ディオニュシオスはすべての基本的な点で（そしてしばしば細かい細部において）ぴったりと一致するという事実は、これらすべての人に反映した基本的に共通の伝承があったことを意味する。この定まった伝承は初期の年代記作者の作品に多かれ少なかれ忠実に再現されたに違いない。リウィウスとディオニュシオスがかれらの典拠の間の小さな相違だけを記録したというのは事実である。リウィウスとディオニュシオスは現実に参照した典拠を読んだのである。リウィウスはピクトルなど初期の著作家を二級の典拠から引用したという見解がほぼ誤りであるのは確実である。ディオニュシオスの学識は一般に認められている。前3世紀の教育あるローマ人もまた伝承によく通じていた。ピクトルの新機軸はそれを最初に書き下ろしたことであった。実際クロノロジーの枠組はすでに存在しており、そして大神官の年代記も毎年の事件の組織的な記録を含んだと思われる。ローマ人はアーケイック時代の記念物や遺物、規則正しく執行された古い年代の祭祀などに取り巻かれていた。

以上のようにコーネルは共和政最後の2世紀のローマ人は、遠い過去から伝えられた信頼できる歴史の情報を十分にもっていたのであるから、それから離れることはできなかったと言う。しかし歴史家は直面する解釈上の難問を十分理解したかということも必ずしもそうでなく、データを自由に使って説明できなかったと次のように主張する。

ローマ人は、歴史的な批判の技術に習熟していなかったのではないが、必ずしも歴史な研究の手順を踏まずに、過去が現在とは異なるという歴史的批判の基本原則など知らなかった。アーケイック時代を、実際にあったように理解しようとしなかった。遠い過去を自分の社会の理想であり模範と見、伝承の類似性を強調するあまりその違いを見過ごした結果、気づかずに真実を曲げたかもしれない。共和政初期以来の制度の機能とその精神の連続性を誤って当然のことと考えた結果、アーケイック時代の特徴を認識できなかった。その1例として *nexum* に反対する平民の煽動を挙げることができる。 *nexum* によって貧民は隷従の身分に落とされ、永

久に富裕者に奉仕しなければならなかった。前4世紀末に廃止されるまで法律学者はその真の性格を理解できなかった。nexumは歴史的な伝承において借金と関連づけられ、共和政末期まで続いた借金による隷従と同一視された。しかしnexumは12表法に規定された過酷な借財法と区別されなければならない。nexumは借金と無関係な、おそらく名目上の「貸し付け」に対する支払契約を結ぶ形式的な手段とみなされる。これは伝承が信頼できる歴史的な事実を保存しているが、しかし誤って説明している例と言える。

コーネルは初期の平民の性格を論じた論文[46]や身分闘争時代の社会問題に関する論文集[52]に寄稿した最新の論文[54]においても同じ結論を述べている。「私の作業仮説は、ローマの歴史家や古物愛好家は信頼できる歴史的な情報の確実な集成を用いて研究したということである。問題は歴史家たちが直面した難問をかならずしも理解せず、意のままにできたデータを適切に報告できなかったということである。キケロやリウィウスのような作家が利口でないとか正直でないとか言うつもりはない。その反対である。ローマの非常に古い過去の理解が損なわれたのは、歴史家たちが自分たちの社会とはすっかり違った社会を扱っているのだという理解がなかったからである。」[46]

## VI

コーネルの見解に対する反応はどうであろうか。ラーフラウプ[53]は、共和政初期の年代記の伝承に関して、コーネルが主張した結論とは非常に違う結論に達していると言いつつも、両者の見解は非常に近いと認めている。そしてラーフラウプは、年代記者の悪評を擁護するとき目的と効果は区別されねばならないとしても、年代記者は世評高い、真面目で、重要で、真剣に受けとめる価値のある歴史叙述の文学のジャンルを代表したのであるから、このジャンルの形成と発展は徹底して調査しなければならないと主張したコーネルのなみなみならない深い関心に讃意を表している。さらにラーフラウプの見解の特徴は、次の主張によく現れている。コーネルが、「共和政の最後の数世紀のローマ人は、アーケイック時代の政治的、社会的現実の真の性格を理解しなかった事実を考慮しなければならない。ローマ人はデータを自由に用いる努力をしたが、不適切で、時代錯誤のモデルを応用しなければならないので、われわれが最も基本的な問題でも、その回答はこれらの史料に根拠を置くことはできない」[54]と述べるのに全面的に賛成すると言う[53]。だがもしラーフラウプの讃意の力点が、「これらの史料に根拠を置くことはできない」というところにあるとすると、コーネルの主張を多少誤解していると考えられる。コーネルはローマの歴史家がアーケイック時代を真に理解していたわけではないから、必ずしも正しい歴史を残さなかったとしても、現存する記録や歴史家の著作には意識的な歴史の捏造とか誤った歴史の挿入はなかったという結論に到達している。今やガリア人の侵入時の大火によって記録が失われた、ということはあるまいと言っただけで、伝承や現存する歴史が全く正しいと言えないにしても、意識的な記録の操作や歴史の捏造は否定してよいだろう。コーネル[37]は最初のコミティウムを破壊した火災はガリア人の劫掠と関連づけられないと言って、これは前390年の破局の痕跡は残っていないことを意味する、と述べたが、この意見はオウグルヴィー[30, 43]やリシャール[50]によって受け入れられた。サトリウム碑文の発見以来、共和政最初の年の執政官、プブリウス・ヴァレリウス・ポプリコラの実在の可能が高まり(グアルドゥッチ[39], リシャール[50])現存する執政官の信頼度

も一段と高まったことは間違いない。

この問題に関する我が国の研究に一言しなければならない。毛利晶「Cornelius Cossus の決闘伝説と Livius」『西洋古典学研究』XXXII 1984, 91-101と同「伝説とローマの歴史叙述」, 弓削達・伊藤貞夫編著『ギリシアとローマ—古典古代の比較史的考察—』(河出書房新社, 1988), 327-358である。リウィウスは, コルネリウス・コッススが一騎討ちで破った敵の王の武具を *spolia opima* として神殿に捧げたとき, *tribunus militum* だったとする典拠を採用し, そのときコッススは執政官であったという神殿碑文があることをアウグストゥスから聞いたのに, この異説を深く検討することなく退けたことが問題にされてきた。毛利は「アウグストゥスが発見したと主張する銘文は存在しなかった」とし, その捏造は「古代学者に伝えるために為された」と考える。そしてリウィウスの叙述の態度は, 古い時代の伝承の是非は結局定められないから, 年代記が伝えることをできるだけ辻褃を合わせて述べるもので, かれには「真実の探求といった学問的な情熱はなかった」というのが前者の結論である。後者において, マルクス・ウァレリウスの決闘伝説が後代の年代記作者による作り話かどうかについて論じ, 後期年代記者は古い共和政時代のまだ文学化されていない生の言い伝えを使って決闘伝説を書いたことも考えられるという立場を示した。これらの主張は, 古記録に対してもリウィウスの叙述の態度に対しても懐疑的な評価の姿勢を依然として持しているが, けっして極端ではない。

キケロ, リウィウス, プルタルコスなどが, 記録の改竄や捏造があったと語るのは, かなり古くよりそのように信じられていたと考えて間違いないであろう。しかしそれはあくまで1つの見方にすぎなかったと思われる。そしてキケロやリウィウスなどがこの見解をしぼしば考慮したということは, かれらの叙述の態度がそれだけ真剣であったことを間接的に裏づけると見てよいだろう。

また古記録や歴史の組織的な捏造はなかったということを別の面から考えてみたい。ローマ人はかれらの歴史を一貫性あるものとして理解したので捏造が入り込む余地はなかった, と指摘できる。ペーシュル [23] はかれが編んだ論文集の序言において次のように述べる。ローマの歴史叙述はすべてローマ市の建設以来の歴史を述べるという統一を成していて, ローマの歴史のこの統一性と連続性の観念は, 大カトがはっきりと言明した(キケロ『国家について』2, 2)。「大カトはよく次のように言ったものである。われわれの制度がそういうわけで他の国々を凌駕しているのは, 国家はほとんどの国で, 一人の人間, つまり法と制度の創始者によって建設されたからであるが, (中略) ローマ人の国家は一人の天才ではなく, 多くの天才に基礎を置いていた。ローマ人の国家は1世代で築かれたのではなく, 数世紀にわたり, 何世代にもわたって築かれた。『なぜなら, 何物もその人の注意を免れえない, 異能をもつ天才はかって生まれなかったし, 現実の経験と時の試練の助けなくしてすべての準備を将来にわたりすべての人の力を結合して一挙になしとげることはできなかった。』と大カトは語った。」このような歴史観をもつ人々にとって意識的な歴史の捏造は考えられなかったとみなしてよいだろう。

それでも初期のローマの歴史叙述をめぐる問題は解決されたわけではない。執政官表の信憑性をめぐる疑問は依然としてなくなっていない。前366年以前の平民出身の執政官は正しいであろうか, 執政官相当の軍事護民官設置の目的はなにか, などアーケイック時代の問題は数多くある。コーネルはローマの歴史家は必ずしも正しいことを伝えたのではなく, ただかれらが正しいと思ったように書いたのであり, アーケイック時代のローマについては前1世紀の歴史家たちよりもわれわれの方が遥かに多くのことを知っている, と指摘し, アンポロ [37] もアー

ケイック時代は記録の豊富な時代であると考古学発掘の成果によって証明されるが、だからといって、伝承を頭から正しいと信じることはできないと主張しているだけに、多くの問題の解決が今後の課題として残されていると考えなければならない。だから現存の史料を擁護する立場にせよ、批判する立場にせよ、初期のローマ史の研究はさまざまな点からおこなわれている。バイエ [6], ヴェルナー [22], オウグルヴィー [30], ローソン [31], コーネル [46], ディドレイ [47], リンシャル [50], ラーフラウプ [52] などはアーケイック時代のローマ史の問題の解明の具体的な試みである。もちろん現存する史料に対する態度は各人さまざまである。

最後にローマ史とギリシア史の比較について一言しておきたい。コーネルは1983年4月リーズ大学において開かれた「ギリシア・ローマの歴史家」と題する学会において発表した論文「初期ローマの歴史的伝承の形成」において、「ローマ人の王についていくつかの分厚い本があるが、ピストラトスについて同じ種類の本を書くことは全くできない相談であろう。かれについては現にほとんど知られていないので、オズウィン・マーレイはアーケイック時代のギリシア史についての最近書いた優れた著書においてかれに言及することをすっかり忘れた」と述べ、聴衆の笑いを誘った。このとき発表された論文は、この学会の報告論文集、*Past Perspectives*, Cambridge 1986 に収録された [51]。しかし上に引用した文章は、学会発表の直後に筆者が頂いた原稿において、削除を示す線が引かれていたし、論文集に収録されたさいにも削除されている。けれどもコーネルの考えはまことに興味深いものがある。アーケイック時代のギリシア、とりわけアテナイの歴史は、ギリシアの歴史家によってほとんど取り上げられなかった。ヘロドトスの『歴史』がしかりであり、トゥキュディデスの『戦史』の「アルカイオロギア」においても実質的な内容はほとんどない。たしかにローマには線文字Bに相当する記録はないし、ホメロスの叙事詩に匹敵するような文学もない。ホメロスの叙事詩が描く世界は、アーケイック時代以前のギリシア、フィンレイなどの最近の有名な主張に従えば、暗黒時代のギリシアであると言う。このようにギリシアのアーケイック時代は、最近になりその重要性が声高く叫ばれているものの史料の不足からくる理解の難しさは否定できないだろう。これに対してローマのアーケイック時代は上で論じたようにはるかに豊かな、しかも従来の見解とは違って、信頼できる史料が残されていると言えるのである。

しかしギリシア史についても最近では様子が少し違ってきているのではないだろうか。ホメロスの叙事詩の舞台はいつの時代か、ミュケナイ時代か、それとも暗黒時代か、あるいはアーケイック時代か、なお決定しがたいところであるが、歴史の史料としての価値があると注目されているからである。ここでは1例を示すとどめる。オデュッセウスが辿り着いたスケリエー島について次のように語られている。「バイエクス人は昔、かれらよりも力が強く、常にかれらを痛めつけていた、思い上がったキュクロプス人のほど近く、広いピュペレイエーの地に住んでいたが、そこから神さながらのナウトオスがかれらに国を棄てさせ、先導となって、苦勞して生きる人間からはるかに遠く、スケリエーの島につれて来て、住ませ、町に城壁を引きめぐらし、家を建て、神々の社を造り、畑を分配した。」(『オデュッセイア』VI 4-10. 高津春繁訳, 世界古典文学全集)。ここに現れる固有名詞はすべて架空のものであるとしても、これはまさしくギリシア人の植民市、アポイキアの建設の様子を正確に伝えたものと考えてまちがいないであろう。古代の伝承に歴史的事実を見ることができるとは好例である。

## Bibliography

- [ 1 ] Th. Mommsen, Die Patricische Claudier: Zuerst gedruckt im Jahre 1861 = *FR I* 1864, 285–318.
- [ 2 ] H. Nissen, *Kritische Untersuchungen über die Quellen der vierten und fünften Dekade des Livius*, Berlin 1863.
- [ 3 ] K.J. Beloch, *Römische Geschichte bis zum Beginn der punischen Kriege*, Berlin / Leipzig 1926.
- [ 4 ] T. Frank, Roman Historiography before Caesar: *AHR XXXI* 1927, 232–240.
- [ 5 ] Fr. Klingner, Römische Geschichtsschreibung: *Die Antike XIII* 1937, 1ff. = Fr. Klingner, *Römische Geisteswelt*, München 1961, 66–89 = E. Burck hrsg., *Wege zu Livius*, Darmstadt 1967, 17–36.
- [ 6 ] J. Bayet, Tite-Live et la précolonisation romaine: *RPh LXIV* 1938, 97–117 = J. Bayet, *Mélanges de littérature latine*, Roma 1967, 351–375.
- [ 7 ] U. Knoche, Roms älteste Geschichtsschreibung: *Neue Jb. II* 1939, 193–207 = V. Pöschl hrsg., *Römische Geschichtsschreibung*, Darmstadt 1969, 222–240.
- [ 8 ] U. Knoche, Das historische Geschehen in der Auffassung der älteren römischen Geschichtsschreiber: *Neue Jb. II* 1939, 289–299 = V. Pöschl hrsg., *Römische Geschichtsschreibung*, Darmstadt 1969, 241–255.
- [ 9 ] J.E.A. Crake, The Annals of the Pontifex Maximus: *CPh XXXV* 1940, 375–386.
- [ 10 ] A. Klotz, *Livius und seine Vorgänger*, Stuttgart 1940–1941, 287–289.
- [ 11 ] M.W.L. Laistner, *The Greater Roman Historians*, Berkeley and Los Angeles 1947.
- [ 12 ] P. Fraccaro, La storia romana arcaica : *Rendiconti dell'Istituto Lombardo LXXXV* 1952, 85–118 = P. Fraccaro, *Opuscula I*, Pavia 1956, 1–23.
- [ 13 ] P.G. Walsh, *Livy: His Historical Aims and Methods*, Cambridge 1961, 20–45, 110–137.
- [ 14 ] R. Werner, *Der Beginn der römischen Republik*, München 1963.
- [ 15 ] A. Momigliano, An Interim Report on the Origins of Rome: *JRS LIII* 1963, 95–121.
- [ 15 a ] E. Burck, *Die Erzählungskunst des Livius*, Zweite Auflage Berlin / Zürich 1964, ix–xxviii.
- [ 16 ] A. Alföldi, *Early Rome and the Latins*, Ann Arbor 1965 = *Das frühe Rom und die Latiner*, Darmstadt 1977.
- [ 17 ] R.M. Ogilvie, *A Commentary on Livy Books I–V*, Oxford 1965, 5–17.
- [ 18 ] H. Tränkle, Der Anfang des römischen Freistaats in der Darstellung des Livius: *Hermes XCIII* 1965, 311–337.
- [ 19 ] T.A. Dorey ed., *Latin Historians*, London 1966.
- [ 20 ] E. Badian, The Early Historians: T. A. Dorey, ed., *Latin Historians*, 1–38.
- [ 21 ] E. Burck hrsg., *Wege zu Livius*, Darmstadt 1967.
- [ 22 ] R. Werner, Die Auseinandersetzung der frühromischen Republik mit ihren Nachbarn in quellenkritischer Sicht, mit 'A Correction' by R. M. Ogilvie: *Gymnasium LXXV* 1968, 45–73, 505–519.
- [ 23 ] V. Pöschl hrsg., *Römische Geschichtsschreibung*, Darmstadt 1969.
- [ 24 ] E. Rawson, Prodigy Lists and the Use of the *Annales Maximi*: *CQ XXI* 1971, 158–169.
- [ 25 ] K. Christ, *Römische Geschichte: Einführung, Quellenkunde, Bibliographie*, Darmstadt 1973.
- [ 26 ] J. Heurgon, *Rome et la méditerranée occidentale jusqu'aux guerres puniques*, Paris 1969, 378–385 = *The Rise of Rome to 264 B. C.*, London 1973, 244–250.
- [ 27 ] J. Heurgon, L'interprétation historique de l'historiographie latine de la République: *BABG* 1971, 219–230.
- [ 28 ] G. Manganaro, Una biblioteca nel Ginnasio di Tauromenion e il P. Oxy. 1241: *PP XXIX* 1974, 389–409.
- [ 29 ] P.G. Walsh, *Livy. Greece & Rome New Surveys in the Classics* no. 8, Oxford 1974. Repr. whit Supplementary Bibliography(1973–9). Oxford 1980.
- [ 30 ] R.M. Ogilvie, *Early Rome and the Etruscans*, London 1976, 15–29.
- [ 31 ] E. Rawson, The First Latin Annalists: *Latomus XXXV* 1976, 689–717



- [32] T.J. Luce, *Livy: The Composition of his History*, Princeton 1977, 139-184.
- [33] T.J. Cornell, The Foundation of Rome in the Ancient Literary Tradition: *Papers in Italian Archaeology*. I. *BAR*, Supplementary Series 41, Oxford 1978, 131-140
- [34] B.W. Frier, *Libri annales pontificum maximorum: The Origins of the Annalistic Tradition*, Roma 1979.
- [35] D. Timpe, Erwägungen zur jüngeren Annalistik: *A & A* XXV 1979, 97-119.
- [36] T.P. Wiseman, *Clio's Cosmetics: Three Studies in Greco-Roman Literature*, Leicester 1979, 9-26.
- [37] T.J. Cornell, Rome and Latium vetus, 1974-1979: *AR for 1979-1980*, 71-89.
- [38] T.J. Cornell, Alcune riflessioni sulla formazione della tradizione storiografica su roma arcaica: *Roma arcaica e le recenti scoerte archeologiche*, Milano 1980, 19-34.
- [39] M. Guarducci, L'epigrafe arcaica di Satricum e Publio Valerio: *RAL* VIII, XXXV 1980, 479-490.
- [40] R.T. Ridley, Fastenkritik. A Stocktaking: *Athenaeum* N.S. LVIII 1980, 264-298.
- [41] J. Briscoe, Review of T.P. Wiseman, *Clio's Cosmetics*: *CR* N.S. XXXI, 1981, 49-51.
- [42] J. Briscoe, Review of B.W. Frier *Libri annales pontificum maximorum*: *CR* N. S. XXXI 1981, 311.
- [43] R.M. Ogilvie, Review of B.W. Frier, *Libri annales pontificum maximorum*: *JRS* LXXI 1981, 199-201.
- [44] T.J. Cornell, Review of T.P. Wiseman, *Clio's Cosmetics*: *JRS* LXXII 1982, 203-206.
- [45] C. Ampolo, La storiografia su Roma arcaica e i documenti: *Tria Corda: Scritti in onore di A. Momigliano*, Como 1983, 9-26.
- [46] T.J. Cornell, The Failure of the Plebs: *Tria Corda*, 101-120.
- [47] R.T. Didley, Falsi triumphi, plures consulatus: *Latomus* XLII 1983, 372-382.
- [48] T.P. Wiseman, The Credibility of the Roman Annalists: *LCM* VIII 1983, 20-22.
- [49] D. Flach, *Einführung in die römische Geschichtsschreibung*, Darmstadt 1985.
- [50] J.-C. Richard, Rome: Institutions et espace politique. Sur trois problemes de premier âge républicain: *MEFRA* XCVII 1985, 751-784.
- [51] T.J. Cornell, The Formation of the Historical Tradition of Early Rome: I.S. Moxon et al. ed., *Past Perspectives: Studies in Greek and Roman Historical Writing*, Cambridge 1986, 67-86.
- [52] K.A. Raafaub ed., *Social Struggles in Archaic Rome: New Perspectives on the Conflict of the Orders*, Berkeley, Los Angeles, and London 1986.
- [53] K.A. Raafaub, The Conflict of the Orders in Archaic Rome: A Comprehensive and Comparative Approach: K.A. Raafaub ed., *Social Struggles*, 1-51.
- [54] T.J. Cornell, The Value of the Literary Tradition Concerning Archaic Rome: K.A. Raafaub ed., *Social Struggles*, 52-76.

## 付 記

本稿は、昭和62年7月27-28日に開かれた、古代史サマーセミナー（古代解放運動史研究会・歴研古代史部会共催・於東京大学）の第3セッション「エトルスキ研究及び初期ローマ研究とリウィウスをめぐって」において報告した文章に加筆・訂正を行なったものである。本セミナーのコーディネーター、森谷公俊氏には大変お世話になりました。厚くお礼申し上げます。